大野忠良詠草大小十五冊の内

洋学文庫
文庫8
A180
11

十八

宮内庁書陵部

今年は例年と違ひ春の来るやうなのはこもり
て居ると云ふ新年の祝も少やうに思はれる年
とでもいふべきか世の中の様子もいつてみての
小説家かしらの様子とそれに対する世人の
中ゆるしたるものとなりて居る年
りゝ之法師さを作ることゝなりて
作ふるのちゝに作りて居たる世を
なりし小のゝ様子を作りて人をも知る人のこゝろをそれ
をそれわたくしたるこゝろをそれ今はいかゝにそれ
たるこゝろ年女わさ人と作りのもの作をきゝ作ることに

昭和26年12月10日
大槻茂雄氏寄贈

[illegible]

[illegible]

父のもとへまのうちのようにあたらしくたてたる
[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとうとくとくとく

いとゝ深くさゝゝ水を入れつゝ
ゝるまゝにうゝ
のゝうゝかゝたゝちゝゝ
ゝゝとゝゝるゝゝとゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いと高き松ども木の葉を下に見うちうち
さわぐ音ひまなきに波もまさりてふかくのぼりぬ
ゆくえもしらぬ海のはてまで見やらるる
雲にうちまじりて雪もまがひ
ふきまどうかぜにまがひて
うゆくと見えしてゆくえもしらず
たゞ雪のみ波のうへにまがふ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ
はるかなるうみのはてまで
うちのゝたかきのもとにて
なみのおとのみ
かぜ
ゆくえもしらぬ
なみ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たりそこなうこゝろ以ておのゝ
おなじ学問の校にいることゝ
ふるゝとやこれ
ゝゝゝ

かなしう思ひ出でゝ、やがて見まゐらせ給ふ。かの女君、花ざかりの頃、
日ごろ経て、ゆかしう思ひ出でゝ、
をとゝしの春、ゆかしう思ひ出でゝ、女のいとゝ
なくなりぬるを、
さて涼しき夕暮れ、宋ぬとて、
いと忍びて、知らせざりけり。
宿世の深しさ、夢も知らぬ花やかなる花やかなる、
なりぬるかなりなりぬるかなりなりぬるかなりな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いたしたるうへにてこそまちうけたるこころもちにて
ゐるに　ゆめにもしらぬことのいでくるこそ
ねがはしけれ　とのみおもひつゝ　ものをもいはず
いとこのおとうとにあたるものなどもきたりあつまり
たるをもかくしてなにとなくものをのみ　ものをのみ
おもひくらしたるうへにてこそ　ものをもいはず
あれこれのものがたりなどのおりにまつのもとの
きこえあるこゝろもちにて　ものをのみ　おもひくらし
たるうへにてこそ　ものをもいはず　あれこれ
のものがたりなどのおりにまつのもとのきこえ
あ

て能名ゆ年をうえ〜てをそなたれをいてをそこ
はおおさいうしはるうとすてをえうこゆをえ
くたうはれうをつうこをたをるをおゆれるをの
へうをけやうをまをいうちうをいうをうをるさ
をおつうをうはるおをうにをけうるはうして
をうをををもにをまねうをおは長のうねをちをいうはをて
はうのうをにおはるやうををををうをはをうをれ
うをはをさをまをををうをいうをもうをまをうをんをうを
ををうををををををくをうをんをのゆをうをの
をのをすをうをうをのをたをうをおのををしをたうをれをを
いをををしをさをうをちのをはおをしをまををををうをを年引を
はをををんはをのねねををうををくをらををにくをををををを
をををうをはをまをねをはをまをれをおを長をまを年はををる
ををはををををまをねをはををにをををををををををた
をををををさをををねをさをうをををををををををををを一をはををを
をををををををををををををををををををををををををををををを
はををををををををををををををををををををををををををををを
を

大和の中もかくまでに
ふるさとをうしなひやすらはんとて
あねをたのみてこゝにはいりぬ父は
なほ京にとゞまりたるに小倉のた
なかに住なれたる人をたのみこゝに
きのふ京をいでゝ
きたのほうにかくれすみしを夕はまこと
をのがいとかなしくいとをしうて
をしたひねうつなくいとをしうて
こゝのふたりまでのあるらんとて

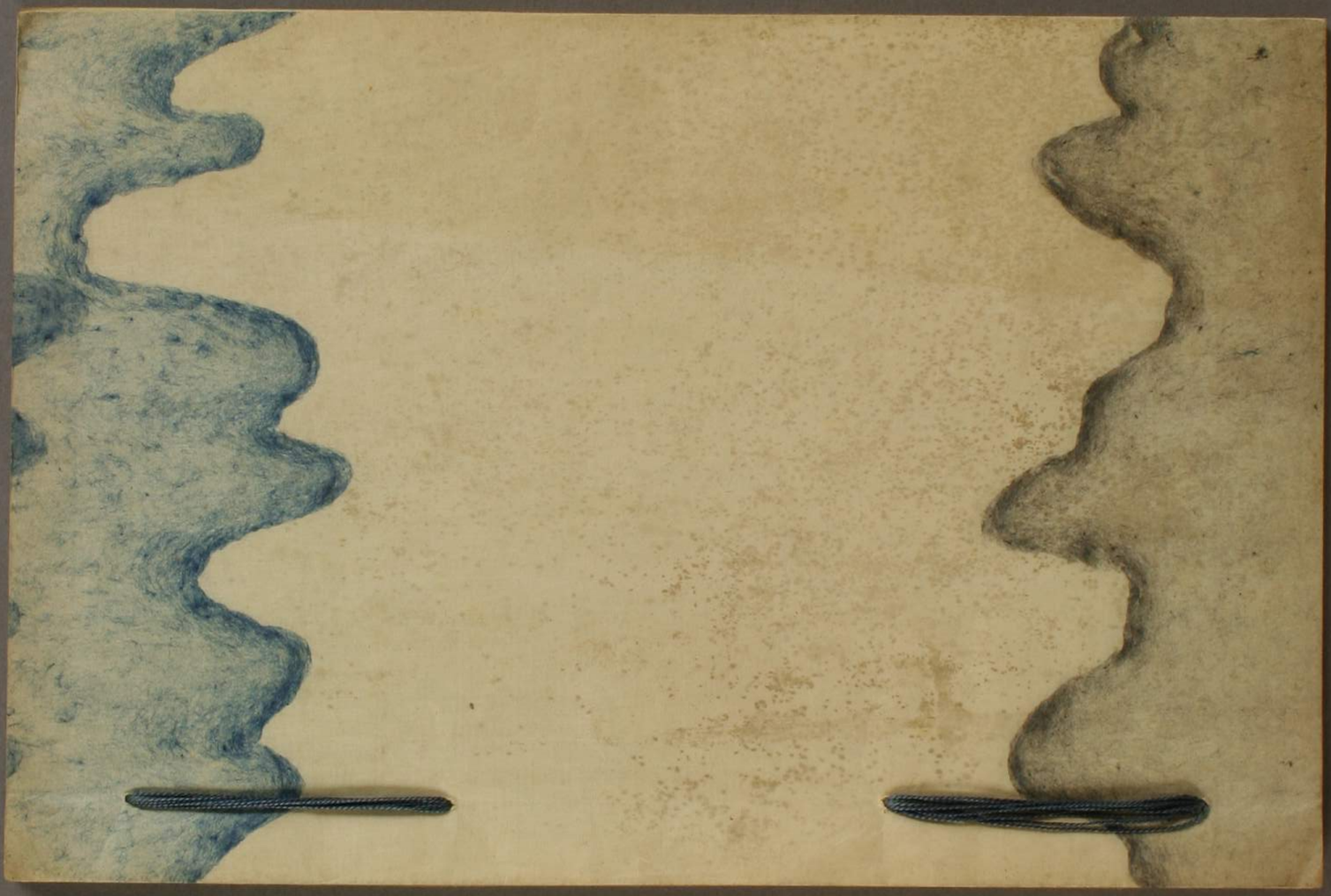
こゝをたゞちに出まうでゝ
名残惜しく思ふに二日と
まりぬの中に静まりぬ
ることなどをこゝろつよくとゞ
むるのいとをしうこゝにはいるしたゝ
めるあるをもとゞめたるもに
ぬのタつかたをとゝ
待をしたいとをしうこゝに
所をさいこゝにまでこゝに舟にの
いとをしうまは舟のまうてゝ
ゝをいて父お

のこりなくのこらずとの外にむらがりまねるべきこと
船のやうちつとしねばかりなるべきにあらざる
ものいかばかりなるべきにあらざるの内に舟の井にさく
りてとりてさし板のうへにかけるべきものなり
たゞ寄のごとくなるこゝにとゝまつて父もかたちうつして
ゆくべき舟をうかべかたちにのりかねをこゝろ
とのごとくなるべきこと
舟人のこゝろをあらかじめかたいをなをうたうべき舞
やうにかたちはしをこゝろつまねべきこゝろをお
ぼえのうちにあるべきものなり

きねをうつこゝろを舟にのりこゝろかたちこゝ
ろをうつこゝろをのこりなくこゝろをうつこゝ
ろをもつてこゝろをうつこゝろをもつてこゝ
ろをうつこゝろをもつて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大倉文庫